2012年度　東北文化公開講演会

表象としての身体―死の文化の諸相

2012年11月24日（土）・25日（日）

会場：東北大学川内キャンパス　マルチメディア教育研究棟

第１日　研究発表（11月24日）13時00分～16時15分［司会　本村昌文（東北大学協力研究員）］

開会の辞　大　渕　憲　一（東北文化研究室　室長）

発表構成・趣旨説明　小田島　建　己（東北文化研究室　研究室員）

発表１「死に逝く身体と<向き合う>ということ―看取りの現場から」

近　田　真美子（東北福祉大学講師：精神看護学）

鳴　海　　幸（キャンナス仙台中央：在宅看護）

発表２「儒礼における埋葬への視線」

高　橋　恭　寛（東北大学博士後期：日本思想史）

発表３「<死体なき墓>と墓参―宮城県岩沼市の被災墓地」

小田島　建　己（東北大学専門研究員：宗教学）

発表４「弘智法印について」

ジョン＝モリス（東北大学博士後期：日本思想史）

発表５「インド・チベット密教における死兆と臨終儀礼」

菊　谷　竜　太（東北大学専門研究員：インド学）

総合質疑

第２日　講演（11月25日）10時00分～16時20分［司会　鈴木岩弓（東北大学大学院教授）］

講演構成・趣旨説明　鈴　木　岩　弓（東北文化研究室　幹事）

講演１「埋葬の現場における身体」

小　谷　みどり（第一生命経済研究所主席研究員：死生学）

講演２「西洋古代における死とその表象」

芳　賀　京　子（東北大学大学院准教授：美学）

講演３「死の概念形成と身体」

杉　山　幸　子（八戸短期大学教授：発達心理学）

講演４「死絵における死のイメージ」

山　田　慎　也（国立歴史民俗博物館准教授：民俗学）

コメント　鈴　木　岩　弓（東北大学大学院教授：宗教学）

総合討論

閉会の辞　永　井　　彰（東北文化研究室　幹事）

企　画　主　旨

小田島建己　菊谷竜太　高橋恭寛

東北文化研究室は昭和30年、東北大学文学部に設置された学部内共同研究室である。

本研究室の淵源は、東北・北方史関係の調査研究を進め、斯界の研究施設として多大な成果を上げてきた、東北帝国大学法文学部の「奥羽資料調査部」に求められる。そのような伝統を引き継ぎ設置された本研究室は、東北地方の地域文化に対する学問的な関心の拡大と深化に応え、文学部を主とする東北大学の人文・社会科学分野を統合した東北地方の文化の総合的研究の推進機関としての歴史をもつ。

昭和33年には、それまでの研究成果や地方文化に対する貢献が認められ、文部省から附属施設経費が認められることとなり、文学部を中心とする関係教官を研究員とする研究組織は次第に強化されてきた。

昭和37年に文学部に日本文化研究施設が附置されるに及び、本研究室は同研究施設の分室となって運営されてきたが、日本文化研究施設が文学部の附置施設から離れた平成８年度からは独立した附置施設となっている。

東北文化研究室ウェブサイト「歴史・沿革」より

東北文化研究室では、学術成果を広く発信するため、研究室が刊行する紀要および資料叢書の他に、公開講演会を例年主催している。講演会は、当研究室の研究員（文学研究科および東北アジア研究センターの講師以上の教員）の内から選出された幹事が企画・立案し、準備を進めて開催することが常であった。研究室員（助教、専門研究員、大学院生）は、この準備を補助し、事務的な作業を行うことが通例であり、企画の内容まで立ち入ることはこれまでなかった。しかし今回の公開講演会は、幹事の先生方から深甚なる御理解と御信頼をいただき、研究室員が企画・立案の中心となって準備を進めることとなった。そのため例年の講演会に比して不手際なところもあるかと思われるが、御寛恕いただけると幸いである。

さて、本講演会のテーマは「表象としての身体―死の文化の諸相」である。

現代日本では、〈死〉の医療化が進み、臨終の場が家庭内から病院へと外部化し、葬儀においては業者の利用が浸透し、また埋葬の方法も土葬から火葬へと変化した。日々の生活の中で〈死〉を身近なものとして感じない人も少なくないと思われる。

〈死〉は、どこかしら「わたし」に実感を引き起こさないかたちで、我々の眼前を通り過ぎて行く。〈生〉にあるうちは経験することができない〈死〉を、我々はどのように捉えようとしているのだろうか。また、どのように捉えることができるのだろうか。

例えば、〈死〉に纏わる事柄は、「たましい（魂）」や「死後」といった「死者のゆくえ」あるいは「あの世」という観点から論じられることも少なくない。また、遺された〈身体〉という観点から、「骨」の問題が取り上げられることもある。

日々の生活では「わたし」に隷属していると考えがちである〈身体〉も、「わたし」の〈死〉の場面では、おそらく異なる側面を持つことになるであろう。〈死〉を迎えた「わたし」の〈身体〉は、他者との関係の中でその位置を定められ、扱われるものとなる。

東日本大震災の発生によって、〈死〉や〈死体〉を意識する機会が以前より増したのではなかろうか。〈身体〉を通じて〈死〉を語ることとは、「生きているわたし（たち）」が〈死〉を考えることである。ならば、「生きているわたし（たち）」にとっての〈身体〉は、〈死〉からどれほど離れているのであろうか。身体の衰えなどを自覚する機会がなければ、この距離感を考えることも少ないのではないだろうか。そこで、本講演会では〈身体〉をキーワードに、様々な〈死〉の文化を語ることを通して、我々の〈身体〉と〈死〉との距離を聴衆の皆様と共に考えてみたい。

１日目は、まだ研究の門戸に立ち始めたばかりの若手研究者を中心に、それぞれの研究発表を行う。２日目は、東北大学の外部からも講演者を招聘し、関連するテーマに則った講演を行う運びとなっている。１日目は東北地方を主要な軸として意識した発表を行い、２日目には、東北地方の事例に止まらず、そこから広く敷衍した普遍的な見解を提示することになる。両日ともに、質疑・討論の時間を設け、その日の登壇者ならびに会場の参加者による意見交換や質疑応答を活発に行うことで、本講演会の主題である〈身体〉、そして〈身体〉を取り巻く〈死〉の文化についての理解を深めたい。

我々人間にとって最も根源的に深く関わると考えられる「死者と生者との境界」、「生者の残存物としての遺体と墓の設置」、「霊性と肉体との関わり」といったテーマを、本講演会では、幾つかの異なるアカデミック・ディシプリンを背景にした研究者によって、それぞれの見地から切り取ってもらうことを試みる。そして、それぞれの見地から切り取られた見解を参加者が共有することで、さらに新たな展開へと進むことを目指している。

また、人文学研究という枠に捉われずに、現場での視点も交えた議論を進めることで、人文学研究がいかに〈身体〉と〈死〉に関わる現場に寄与できるかを考える機会となり、また今後の人文学研究を導く１つの指針を提示するきっかけともなればと願って、準備を進めてきた。本講演会に参加していただいた方々に、少しでも面白いと思っていただけるような内容になっていればと願って止まない。